

県退教協だより
NO. 98

長崎県退職教職員等連絡協議会

九五一八二一五一九五



第42回総代会

第42回総代会は、6月25日(金)、8地域・支部退教から長崎堀田、武田、西彼今村、五島桝田、島南川端、諫早大木、大東川崎、富崎、佐世保宮原、濱田、北松山川、老岐米倉の総代と役員の参加で、長崎市民会館第4会議室で開催されました。議長には川端総代が選出され、会が進められました。

開会にあたり上川会長は、参議院議員選挙に触れる中で、政治は今寛容さが失われているのではないかと問題を提起しながら、外国人や多様性を重視する勢力の排除を口にする政党がどんどん伸びていく風潮があることへの危機感を訴えました。そして、退教協の総力を挙げて日教組、県教組、県平和運動センターが推す候補者の勝利に向けて参議院選挙を闘っていかねければならないことを参加者に強く呼びかけました。また、退職者組織の現状から、これからの運動のあり方はどうあるべきかを喫緊の課題として提起しました。来賓のみなさん方からは力強い連帯のあいさつがありました。その後、参議院議員選挙特別報告として、みずおか俊一日政連候補の後援会会長泉雄一郎さん(元日教組委員長)より、少数与党での国会状況、様々な課題(給特法、選択的夫婦別姓制度、政治改革、消費減税など)の情勢と、立憲の支持が伸び悩み比例での水岡の順位も厳しいので、安全ライン

に押し上げて欲しいというお願いがありました。続いて、日退協会長の竹田邦明さんから、社会保障を中心とした内容の報告があり学習を深めました。

議案は、1号経過報告、2号決算・監査報告、3号運動方針案、4号予算案、5号役員改選と順に審議され、質疑・討論を経て提案通り承認されました。

1号議案では、佐世保より数点の質疑が出されました。私学助成の請願署名の取り組みは、憲法第89条に違反するので、要請があつたものをそのまま取り組んだもので論議をしていなかった。今後日教組にも問い合わせて論議をしていくと、答弁しました。2号議案では、北松から会費徴収、佐世保から決算に関する質疑があり、執行部からは丁寧な答弁がありました。3号議案では五島から、解散した退女教に対して退教協として一緒にやらないかとお誘いをしている報告と上五島町議会への「核兵器禁止条約」批准を求める請願の取り組み（採択）が報告され、県の自治体で100%達成を目指す取り組みをしてほしいという要望が出されました。島原市など請願が通らない議会は、中身より誰が請願を出したかで否決されている現状があり、議会の質が問われていきます。佐世保から「60歳超職員」の賃金の3割カット、「退職団体への個人加盟」、「核と戦争のない世界」に関する質疑が出されました。「60歳超職員の賃金の3割カット」については県教組に尋

ねる、「個人加盟」問題は7月19日開催の県高問連幹事会で協議するのでその後知らせる、「核と戦争のない世界」の核は「核兵器」と表現した方がいいのではという指摘に対しては、核は核兵器や原発を含んだ言葉として理解してほしいとの答弁をしました。ネットを活用してウェブ会議を取り入れるなど業務の効率化と経費節減、県全体からの役員の選出という観点で積極的に推進すべきという意見が出され、これからそのように進めると答弁しました。大東からは石木ダム問題に関して、市民による石木ダム再評価監事委員会（市民委員会）の取り組みや、現場の座り込みが報告され、多くの人がこの問題に関心を持ち、現場にぜひ足を運んでほしいとの訴えがありました。参議院選挙では、前回と異なり比例区の取り組みで社民党が触れられていない、前回ように「それぞれ地域・支部の判断に任せる」という表現にしてほしいという意見が出されました。執行部からは原案の通りでお願いしたいということでした。5号議案では、役員選出委員長の堀田総代からの報告を受け、中山副会長退任により大木豊さんが副会長に就任し、他は監査も含めて全員留任という今後2年間の役員構成となりました。

今次総代会は、多様な質疑・意見が出され、時間も大幅に超過しましたが、充実した総代会でした。参加総代のみならず、お疲れ様でした。

（報告／井上事務局次長）

(報告／井上事務局次長)

情勢と退教協の課題

会長 上川 剛史

真夏の参院選が終わりました。我々が推した水岡俊一氏も当選を果たし、民主党も国政政党要件をクリアしましたが、手放しで喜べない結果でした。何とも言えないどんより曇った未来が近づいてきているように思えました。外国人の排斥、核兵器保有・共有、アジア太平洋戦争の美化、国民主権や国民の権利を無視する憲法案を掲げている極右政党の伸びと、新聞やテレビ報道をフェイクと一蹴し、リベラル派を「非国民」「C国のスパイ」などと中傷する内容のSNSでの拡散など、我々が経験したことのない選挙が見えてきました。第一次大戦後の不況と混乱に乗じて、ナチスがどうやって政権を手にしたか、そしてその後の結末はどうだったか。我々はこれからも歴史の教訓に学び、正しい政治を選択していかなければなりません。

さて、退教協の足元を見ますと課題が山積しています。高齢者が増える一方で、退職団体の組織人員は減少の一途にあります。長退連も今年に入って解散、組織改編に追い込まれている組織があります。日退教九州ブロックもこの6年間に4000名の組織人員減が報告されました。長崎県退教協も会員・役員の高齢化で組織的な活動が難しくなった地域もあります。これまで先輩方が築き上げた退教協の活動を継続発展させるためにも活動の在り方や会議の持ち方など再考の余地があるようです。

今年度の県教組の議案書に「学校現場では60歳未満の教職員とともに60歳超の常勤職員、定年前再任用短時間勤務職員、暫定再任用職員が混在して」とあります。いずれにしても60歳を超えると

(定年前でも)賃金が7割に抑えられています。また、複雑になった制度により、誰がいつ教職を辞めたかを退教協役員が把握しにくくなっています。会員拡大の機会を逃しています。退教協は55歳以上であれば男女問わず加入できます。「鉄は熱いうちに打て」ではありませんが、退教協会員が現職の運動に積極的にかかわり、その場で組合員に加入の意思を確認することが効果的です。意識の高い現職組合員は「素直に」加入していただけます。退職し一定期間が過ぎた方の加入は、私の経験からでも容易ではありません。県教組の組織実態から今後多くの新加入は望めません。一人でも多くの仲間を増やし、これまで先輩方が築いてきた退教協の活動の継続・発展を図りましょう。

各地域退教は、時には退女教と一緒に工夫し、いろいろな活動を行ってきたものと思います。何といたっても退教の活動の基本は地域退教で、地域あつての県です。ともに頑張りましょう。県退教も今年度から変わります。県退教の財政が厳しいことは議案で示す通りです。その改善の一助になればということ、9月から役員会議をWEBで行うようにしました。交通費と会場費、そして時間を節約するためです。さてどうなるか？いずれにしても何か変えなくては。

参議院選挙で感じた退教協の力

事務局長 西村祐一

組織会員数減少、高齢化という現状は、退教協の負の現実です。今夏の参議院選挙の結果ではそのことの一つが極めて正直に現れました。

第42回総代会での選挙の取り組みとしての提案は「平和運動センター、日教組

(県教組)が推薦する候補(「みずおか俊一日政連候補の勝利を目指して全力で取り組む」で、承認されました。私たちはこの決定に従い、必勝を期して闘いました。その結果は、投票総数505。県内の比例区個人得票ランキング50位にも入らない数字です。現職、退教協、退女教それぞれ本人と家族、友人知人を合わせた数とは相当なひらきがあります。全国的に見ると、日退教本部の東京は1172、会長の出身県神奈川は6963、候補者の出身県は20306。長崎は、民主党でいくとした地域があったとしても、個人名で投票するとした結果の数値は、傲慢な自公政権に鉄槌をと勇ましく拳を振り上げて、選挙が世の中を変えようと強調しても、あまりにもかけ離れ、低いと思います。総代会で後援会長に來てもらった成果も見受けることができませんでした。兵庫県に選挙戦を引つ張る知人がいますが、現職・退教協を集めて強く檄を飛ばしたと言っていました。役員の闘いにかけるエネルギー不足も要因の一つだったかも知れませんが、この選挙の結果が今の私たち退教協の力です。反対に、誇れることもたくさんあります。3ページに記載されている合同学習会での発表にもありました。個人的にも社会的にも、後半の人生を生き生きと活動している会員の姿です。平和運動、地域活動、社会貢献、文芸創作活動など幅広く生き生きとした活動が各地域で行われています。日退教前会長の竹田邦明さんは、退教協の活動は「人との繋がりと常々言っておられます。組織として、個人として多種多様な人や活動での繋がりで、人を更に高めていきます。私たちが高齢者にとって、私たちがなければならぬ課題と若者に伝え引き継ぐ課題があります。それらを意識しながら

大東の地域活動

ら、長崎県の退教協の会員として、また個人として、健康な体・心を維持しつつ、負の現実を乗り越えるよう生きていきたいと思っています。

大東会長 川崎 学

昨年11月6日に県央地区大東で開催された第33回合同学習会に参加された富崎葉子さんから感想が寄せられました。それを少し縮めて紹介し、活動の報告とします。

合同学習会が私の地元大村で開催され、参加しました。さすがに県全体の学習会です。五島や壱岐からの参加もあり、頭が下がりました。

私は「高齢者として人や社会、自然とどう関わり生きていくのか」というテーマで発表された2人について述べさせていただきます。

井上敏彦さんは「石木ダム問題と関わ
つて」の発表。石木ダムの予備調査が開
始されたのは1972（昭和47）年で、も
う50年も過ぎていきます。その間ずっと地
域住民を地中心に不退転の闘いが続けら
れていきます。ダムとその関連工事に抗議
し、座り込みは2000回以上とのことです。
井上さんは日常的に参加されていま
す。私は3回参加しました。

ダム建設の発端は、佐世保市の水不足を補うためでした。しかし、2000年度から水需要は減り続けており、水源に余裕があるそうです。井上さんの説明で、石木ダム建設の流れや住民の方々の気持ちがよく分かりました。一方的に押し進める県・佐世保市の横暴なやり方に強い憤りを感じます。自然を破壊し人々を分断する政治は「悪」です。川原(こうばる)

がダムの中に沈むことは絶対あつてはな
りません。あの風景を見た時、私はつく
づくそう思いました。工事を中止し、こ
れ以上人を自然を痛めつけるな!

林直孝さんは「自然保護と短歌」の發表。林さんは日本野鳥の会に所属され、現職の時からバードウォッチングと短歌の趣味をお持ちでした。この学習会では、「自然と環境」のテーマで10首、「世界と平和」で5首、「趣味の野鳥」で5首、全部で20首短歌が紹介されました。その中から私もそう思った歌を紹介します。

この星にあるもの全てが遺産なり 登録騒ぎを不思議に思ふ

私の考えと同じ文章に出会うと「そうだ、そうだ」と嬉しくなります。

探鳥という趣味を持ち いつおりか心待ち
する冬のおとづれ

寒くても会えるかなと思うとワクワク
します。かわいい野鳥たちに今年も会
えました。ほのぼのします。

探鳥のオアシスなりし大千潟 田畑と化してその姿を見ず

そこに田畑は必要ですか。石木ダムと同じです。

ヨ力活動

「集う楽しさ」を求めて

北松事務局長 山川大城

・ご存じのように、北松退教協は、平戸・松浦・旧南部(旧北松浦郡)の三地区から構成されています。拠点は北松浦教職員会館(旧北松総支部書記局)です。歴史を紐解けば、1946年3月1日に北松浦郡国民学校教職員組合発足時には、最初の書記局を使っていました。その後、3回の移転を経て現在の場所に在っています。

ます。しかし、今では年数回しか集まる
ことがなくなっています。

現在は、会館評議員会(年2回)、会館清掃(昨年度までは年1回、今年度から年2回)の恒例の会はあるものの、それ以外はなかなか集まることはありません。

退教協独自の活動として、1993年から親睦旅行を実施し、今年で33回め

となり、三ノ宮駅に到着した。当初は、1泊2日で行くつもりだったが、当時は、九州北部を中心に（必ずしも）大規模な被害がなかった。

& 試飲会は当然、旅行委員を中心に計画し、多くの参加者で楽しく実施してきました。

最近は、もろもろの事情で日帰りの旅となり、加えて多くの参加を考え退女教及

は、西海市にある『石原岳森公園』にこの

ある明治時代に佐世保軍港を防備するた
め設置された堡塁跡でした。当時の佇ま

いを残す要塞跡は、歴史を感じることが
できました。現職の時代であれば平和教育

に活かせると感じました。今年は、唐津市の『環境芸術の森』をメインとして実

現在の大きな課題は、活動の拠点である北松浦教職員会館の運営・維持・管理

を今後どうしていくかです。現職・退教・退教協の3者で議論を重ねて一年半

を經過しました。協議の中で度々話題にあがるのは、退女教・退教協に新しい会

員が加入しないことによる5年後10年後の会そのものの存続です。魅力ある組織としていかなければならないと強く感

ています。四月の総会時には、終了後に
にしたいが、四月の総会時には、終了後に
にしたいが、四月の総会時には、終了後に

「けん来年も参加するばい」と先輩方の何ともうれしい声を聞くことができました。

会員が集まって話をすれば、とても楽しい時間を共有することができます。まさ

島南半島地区退女教の活動

（声をかけあう退女教）

島原半島地区会長 柴田輝美

島原半島退女教は、島原市・南島原市・雲仙市の三つの市から構成されています。年に4回発行する「退女教だより」は、活動の様子がわかるように写真を多く載せています。参加できなかった会員の方が、写真を見て連絡されることもあり、会員同士の親睦にもつながっています。おたよりは、役員が手配りしており、持って行った時に1時間もお話をしたというとても珍しくありません。顔を合わせて話すことの大切さを実感できるひと時です。

「教え子・我が子・我が孫を再び戦場に送るな」の運動目標を掲げ、年間を通して折り鶴を折っています。毎年たくさん集まり、「あの夏の日」少女像や平和公園などに献納をします。

学習会は、担当市で計画を立てて実施します。24年度は「ボッチャに挑戦！」を実施し、老いも若きも熱中し、和気あいあいと終えることができました。今年は戦後80年をふまえて平和学習を考えています。

新年会は、米寿と喜寿のお祝いをしています。お元気な姿を見て、ああいう生き方をしたいと目標にもなっています。そのあとは、各市から出し物があり大いに盛りがります。これから顔をみて、話をしながら活動していききたいと思っています。



雑想

青木英夫

宇宙の小さな星（地球）の誕生から今日のまでの長い歴史を思えば、人類誕生から今日のまでの何万年かの歩みは、ほんの秒の何万分の一ぐらいのものだろう。人類がこの星に誕生してから今日までの大きな歩みも、個人の一生も、宇宙の大きさに比べたらほんの1秒の何万分の一ぐらいだろう。

自分の人生の歩みを回想。乳幼児期に医者から見放された時、母が私の命を守ってくれたという。国民学校1年生の時、鉄棒の授業で逆上がりができるまで、母が特訓した。戦地フイリピンの父に書いた手紙の返書も大切にしている。

戦後、伊王島の小・中学校を卒業。炭鉱と灯台の大自然に親しむ。伊王島は第二のふるさとだ。

長崎西校に進学。早稲田の文学部を志望していたが、母が病に倒れたので長崎大学に進学し、中学校国語科の教師となり、市内大浦中学校に勤務。転勤2校目の土井首中学校勤務。同僚の家庭科教師と結婚。第一子の長男がダウン症候群という知的障害児で、鎖肛（肛門が閉鎖している）先天的な奇形だった。乳幼児期の育児に夫婦で苦闘した。筆舌に尽くし難い苦難に天を恨んだ。現在57歳で、ケアホームに入所し、週末に帰省する。

彼を送迎する時に通る長いトンネルがある。そこを通過する時妙な気分になる。息子と二人で天国に行ってしまうのだ。約3分間のドラマだ。トンネル出た瞬間、現実を引き戻される。息子は57歳になっても知的な面では幼児だ。鎖肛だったので排便が不自由で苦労は絶えない。

私たち夫婦にとって、この子はお荷物だが、私にとつては大きな宝ものである。短歌や詩やエッセイにこの子を題材にし、

編集後記

2冊自費出版した。人生万事塞翁が馬だと痛感する。

3月1日の第97号から約半年が経ちます。この間、多くのことがありました。梅雨が早く明け、高齢者にとつて厳しい猛暑が続いています。

組織的活動では、県退教協第42回総代会、参議院選挙、被爆80周年原水禁世界大会、長崎大会と関連行事、連合2025ナガサキ平和集会がありました。会員のみなさんは特に被爆80年にはどのような関わりを持たれたでしょうか。大村市の小学校は2日前の予報で登校日を中止にしました。当日の午前中は危険な天気ではありませんでした。

私的な事は、尊敬する先輩や同級生の死、大腸癌にかかって検査と手術のため入院したこと、1年の加齢、後期高齢者としての免許更新です。癌は、妻もほとんど同時に見つかった。ほぼ同時に入院しました。特に癌で経験したことや思ったこと、反省したことは、治療後の105時間の絶食の辛さ、10日の入院で筋肉が落ちてまともに階段の上り下りができなくなったり、教職員共済で事故対応には手厚く対応していただきましたが、病気の備えを怠っていたこと、私の癌は幸い初期の初期で死を考えたことは全くありませんでした。その原因を考えると、思い当たる生活習慣は少々あります。

まだもう少し生きて、個人的にも社会的にもしたいことや関わりたいたくさんの9月発行で100号になります。多くの会員にこの100号を届けられることを編集員一同心から願っています。